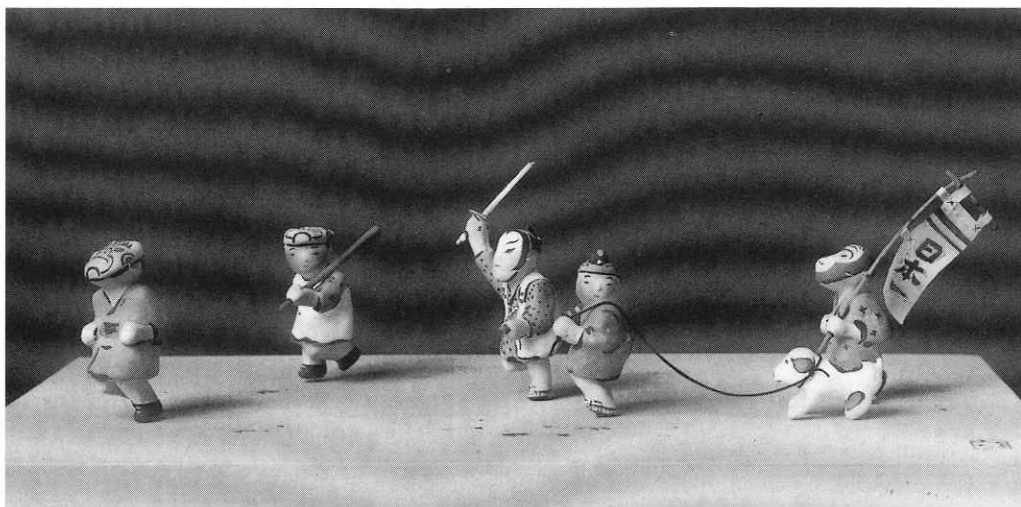
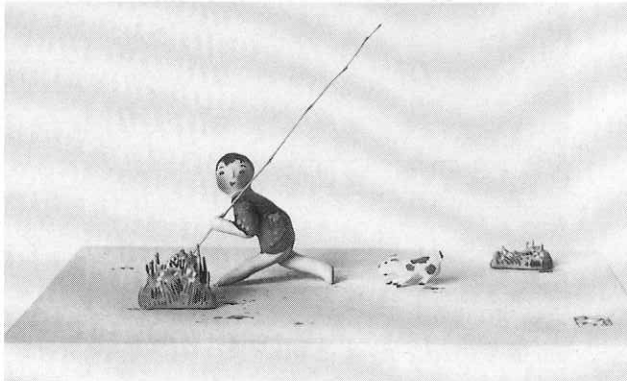


郷土資料館だより

Vol. 23. No.2

2001. 2. 10



写真に残る 三四郎人形

今年2001年は、三島市の誇る創作人形作家野口三四郎の生誕百周年にあたります。

三四郎は1901(明治34)年に三島大中島(現・本町)の野口質店の次男として誕生し、その名は生まれ年34からとられました。そして自分が創作した紙塑人形にも「三四郎」人形と名づけています。

葦山中学(現・葦山高校)時代から芸術的才能を示し、東京に出て三越の早撮り写真の技師となり、ここを辞めた後、1929(昭和4)年頃、張子人形の製作を始め、1937(昭和12)年に亡くなるまで数々の名品を残しています。

上の三四郎人形は野口三四郎の作品集に載る写真でいずれも現存していません。

三四郎の作品の多くが子どもの遊びの世界や

子どもの一瞬の表情を捉えらえた秀作が多く、これらも鬼や桃太郎のお面をつけた鬼ごっこや、魚つりに急ぐ子どもと犬、そして背負った子と、空を見上げる子守りの姿を写したものです。いずれの作品にも子どもの世界に見られる無邪気さ、愛らしさと、落ち着いた詩情がただよいます。

周囲にのどかな田園風景が広がり夕飯時までは遊びに夢中になれるこうした環境は、学習塾や習い事・ゲームに囲まれた現代の子どもたちには別世界となってしまいました。

素朴な三四郎人形が私たちの心を打つのは、日頃忘れていた、ワクワクした毎日の子どもの世界に引き戻されるからではないでしょうか。

電化「三種の神器」登場～洗濯機・冷蔵庫・テレビ～

現在開催中の企画展は「未来への伝言～くらしを支えたもの・モノ・物～」と題して、20世紀に使われた生活道具を展示しています。(会期：～2月25日) 明治中期に始まる20世紀は、大正デモクラシー、戦時体制、終戦、高度経済成長へと時代が変わり、私たちの生活も急激に変わりました。20世紀幕開けの頃は手工業がまだ盛んでしたが、石炭・石油などを燃料とするエンジンで動く機械が開発され、大工場が稼動していきました。また、電気の実用化は、たちまち私たちに暮らしになくてはならないエネルギーになりました。まさに20世紀は電気の時代と言えるでしょう。



テレビの広告：週刊サンケイ1959年(昭和34)4月26日号

暮らしを支えた生活道具の変革の発端は、「三種の神器」の登場でいいあらわされます。「三種の神器」は本来皇位のしるしとして、代々の天皇が伝承する三つの宝物(刀・鏡・剣)を表しますが、戦後史的には電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ(白黒)、これら三種の家庭電化製品をさします。1953(昭和28)年まず三洋電機から国産電気洗濯機の発売をはじめ、「電化元年」という言葉が流行語になりました。そして1955(昭和30)年頃から急激にはじまった家庭電化ブームを象徴する商品群です。この言葉は当時の家電メーカーの宣伝部長の創案だということです。週刊誌にそれが記事になり、急速に広まりました。「三種の神器」には、高価である、でも使ってみたいという憧れが含まれているようです。

「三種の神器」を持つとどのように暮らしが変わるのでしょうか。



井戸端で洗濯たらいと洗濯板を使って(下町風俗資料館：東京)

洗濯

「昔の洗濯」というと、水を張ったたらいと洗濯板に中腰になってゴシゴシ洗う女性の姿を思い浮かべる方が多いと思います。長い間中腰になり、両手で板の上を上下に動かす作業は、当時の女性にとっては大変な重労働でした。

ところがこの「洗濯板」は意外と新しい道具で、文明開化で西洋から伝わり、大正中頃から広く使われだしました。このころから私たちの衣生活もだんだん洋風化され、白いシャツやシャツなどを身に付け、また衛生観念の浸透により、洗濯物が増えていきました。この時に、「洗濯板」は洗濯に欠かせない道具となりました。

洗濯板以前の洗濯法は、川端で上が平らになった石や岩場の上に洗濯物を置き、ひしゃくで水をかけながら両足で踏んで汚れを落とす「踏み洗い」が主でした。ほかに洗剤(豆殻の灰、大根の煮汁など)を洗濯たらいに入れ、衣類を浸しながら洗うという方法もありました。



源平川の川端での洗濯風景(昭和20年頃)

電気洗濯機は、欧米で1900年ごろ実用化されました。日本では1922年頃、米国製品が輸入され、1930年東芝から国産第1号が発売されましたが、高価なこともあり普及しませんでした。

戦後、1947(昭和22)年より家電各メーカーは国内市場の開拓に力を入れ始めました。1951(昭和26)年、各社はこぞって1万8000円~2万円の廉価版の製品を発売したが、売れ行きははかばかしくありませんでした。当時は、まだ「婦徳」があったため、機械に家事をさせることに強い抵抗がありました。また洗濯機自体、ギアの雑音がうるさく、狭い住居では近所迷惑と不評だったためです。各家電メーカーは製品を改良する一方、主婦層に向けて強力なキャンペーンを展開しました。その内容は電気洗濯機のある生活がいかにして主婦労働を軽減するかということで、「日本人一人の洗濯物は一日100^{もんめ}匁、5人家族で一ヶ月^{かん}15貫。3年間で象一頭分を洗うことになります」、「洗濯しながら本が読める」などの宣伝文句には、洗濯は「洗多苦」だということを強調して広めました。洗濯機用の洗剤が製造されるようになった1955(昭和30)年頃から急速に一般家庭に普及し、1963(昭和38)年には普及率が50%を越えました。1970年代には、洗いからすすぎ、脱水までを一貫して行う全自動式が現れました。西暦2000年、ついに洗いから乾燥までの行程がボタン一つで自動化された洗濯機が登場しました。

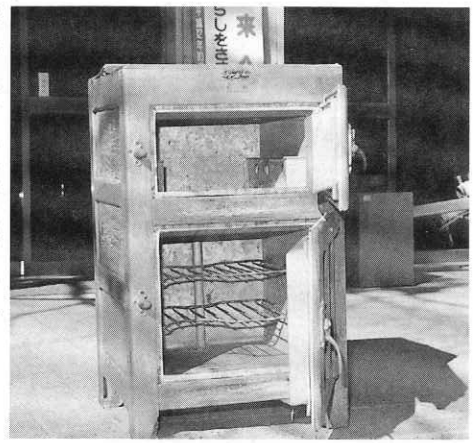
冷蔵庫

欧米では19世紀、氷点以下の温度を作り出す原理が開発され、その応用で1910年代に電気冷蔵庫を実用化しました。しかし、家庭用としての普及



全自動洗濯機の登場。操作ボタンが現在ものより大きい。
1975年(昭和50)頃

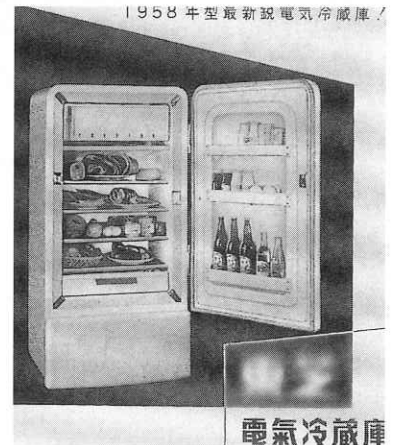
木製の「氷の冷蔵庫」(館蔵品)
昭和5年頃、魚店でこの冷蔵庫を購入したが、すぐに大きい物に買い直し、その際これを譲り受け、昭和43年頃まで使用したという。



からはほど遠いものでした。日本では大正から昭和戦前にかけて製氷業が街角で営業し、各戸への配達も行いました。この当時の冷蔵庫は氷塊で保冷する木製ブリキ張りのものでした。上の段に氷を入れ、その冷気で下の段の魚や野菜などを冷やしました。冷蔵庫はもともと食物の雑菌の増殖を防ぐ衛生面から推奨されますが、一方ではメロンなどを冷やすための贅沢品として普及しました。

1955(昭和30)年の木製冷蔵庫と電気冷蔵庫の広告が共に載っている新聞広告の値段を見ると、木製が6500円、

電気が6万5000円から8万9000円と約10倍の開きがありました。高額にもかかわらず電気冷蔵庫は年配の方にも広く受け入れられ、木製の氷冷蔵庫は電気冷蔵庫にとってかわられました。



電気冷蔵庫 宣伝ポスター

当時の電気冷蔵庫は1ドアでした。最上部が冷凍庫になっていましたが、霜がバリバリとついてそれをとるのに結構手間がかかりました。子どもが勝手にあけないようにする、「カギ」の付いた機種もありました。

冷蔵庫は、冷凍食品の流通が始まるとともに冷凍室が大きくなり、1965(昭和40)年頃から2ドア冷凍冷蔵庫が発売され、次第に大型化が進んでいきました。

現在では、冷凍庫と電子レンジがあることで、調理がインスタント化される傾向にあります。

テレビ(受像機)



テレビが我が家に(昭和30年代) 活躍しています。

テレビ放送は1920年代欧米と並んで日本でも実験が進み、1940(昭和15)年には放送は実用化が予定されていました。戦争により実験の中断がありました。1953(昭和28)年に放送が始まり、1970(昭和45)年ころには、世帯普及率が90%を越え、史上空前の大衆メディアに成長しました。

初期のテレビ番組は舞台中継や、スポーツ中継、あるいはラジオの人気番組の同時中継などが多かったようです。当時一般家庭でテレビを購入するのはまれだったため、飲食店、電気店など「街頭テレビ」に人々が群がって見ていました。テレビ番組に興味がなくともテレビ自体が珍しく、立ち止まって見ていたそうです。

その後、少しずつテレビを持つ家庭が増えてきました。テレビは貴重なため神棚のある部屋などに置かれたようです。テレビは、見ないときには映画館のカーテンのようなものがおろされていました。「月光仮面」のような人気番組では子どもたちがテレビを持つ家に見に行き、あまりに大勢集まるので正座をして詰めて入ったそうです。

1959年(昭和34)の皇太子(現天皇)ご成婚の実況中継、そして1964年(昭和39)の東京オリンピックの中継を見ようと、飛躍的に普及率が伸びてきました。その後はカラーテレビに替わり、「チャンネルを回していた」操作はリモコンで操作が出来るようになりました。

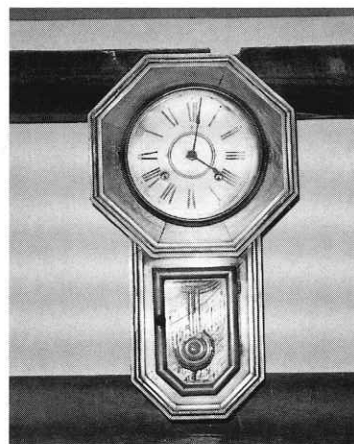
テレビの放送方式も衛星放送が始まり、昨年末からはデジタル放送が開始されました。今後、テ

レビメディアはまた新しい展開が予想されます。たくさんの情報量の中、自分に適した情報を選び、活用していきたいものです。

21世紀へ受け継ぐスタイルは？

国民生活白書(昭和32年)によると「ガス・石油の需要が大きく増加し、薪炭の消費が減少」という見出しが現れます。この頃を境に家事用品からはじまった家庭の電化は、レンジや掃除機など生活道具だけではなく、テレビやビデオ、ゲームなど娯楽にも欠かせなくなりました。また現在オール電化の住宅建設も進められています。20世紀は商業経済が浸透し、たくさんの商品が生み出され、次々に私たちの購買意欲をかき立てていきました。

新製品が出るたびに、よりよい商品が作られているような感じがします。しかし電気が支えている現代社会は、災害時などで停電にみまわれた際、大変不便なことになります。効率や便利さを追求してきましたが、一概にそれが進歩といえるかどうかわかりません。21世紀、すべてに合理化、効率化を追求だけでなく、また古いものはすべて時代遅れとひとくくりに片付けず、新時代にも通じる原理は残していきたいものです。



最近レトロ調の時計がクォーツ時計で復活しているようです。(写真：昭和初期 館蔵品)

参考資料

- 『図説・台所道具の歴史』 1978年 柴田書店
- 『道具が語る生活史』 小泉和子 1989年 朝日選書
- 『昭和家庭史年表』 1990年 河出書房新社
- 『大衆文化事典』 1991年 弘文堂
- 『家電製品にみる暮らしの戦後史』1993年 ミリオン書房
- 『昭和浪漫図鑑』 町田忍 1998年 WAVE出版
- 図録「昭和30年代の暮らし」1993年 小樽市博物館

むかしにチャレンジ!!

郷土教室「竹ざいく」ーウグイス笛を作るー

平成12年7月8日(土) 講師 静岡マイスター 瀬川到氏 参加人数 小学生20名



はじめに、家庭内の竹製品や、刃物類の使用経験や、ケガの経験を問いかけたところ、あまり経験がないようでした。切り出しナイフの扱い方を説明した後、ナイフの使い方の練習として、割箸を鉛筆状に削る練習、その後実際に鉛筆を削りました。

ウグイス笛の製作では、笛作りの材料に長さ5、6センチの太目の竹と細めの竹を使います。太目の竹に事前に開けられた穴の周囲をナイフで削り、さらに細めの竹を斜めにカットしました。そして細めの竹を口で

吹きながら太目の竹の穴近くに近づけ、一番音がいいところで部品を接着剤で固定しました。

慣れないナイフでの工作でしたが、できあがると早速笛を吹いてウグイスの鳴き声を出して、音色の美しさを競い合っていました。



夏の郷土学習「藍染め体験」

平成12年8月3日(木) 講師 遠州屋染物店 高林 保巨氏 参加人数 小学生38名



暑い中、藍や紅をひいています

企画展「くらしを支えた職人」に関連し、三島の水を活かした職、紺屋(染物屋)の体験をしました。

遠州屋高林さんより染料などの簡単な説明を受けた後、あらかじめ下絵ののり付けがされている約5mの木綿に、藍や紅染料を刷毛で思い思いに塗り、日光で発色させました。天日干しで十分発色した布を、遠州屋の裏を流れる桜川にさらし、のりを落とし、それぞれに裁断して参加者に手渡しました。

続いて、「藍染め」の下絵がついた布を、藍がめの染料に二度ずつつけ、水に軽くさらし、乾かします。あざ

やかな藍色に染まりました。

紺屋の仕事は天気と水が勝負です。この日は天候に恵まれ、染物に適した一日でした。



川にさらしてのりを落とします



とってもよくできて満足!!

平成12年10月19日 資料館館長 杉村斉が急逝いたしました。永年当資料館にて学芸活動に従事し、市民の皆様とともに三島及び県東部の歴史、民俗を調査・研究してきました。

杉村館長が最も力を注いだ研究「三島暦」のレポートを3回にわたり紹介し、故人を偲びたいと思います。

三島暦研究・調査報告

～三島暦の弘暦について①～

杉村 斉

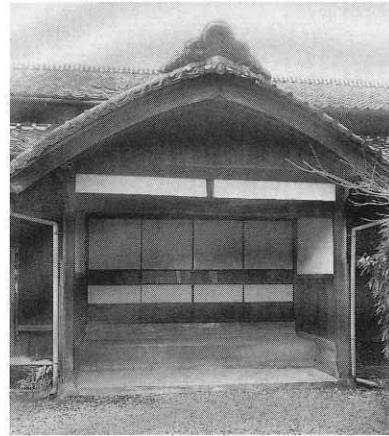
(静岡県博物館協会 研究紀要 第20号 平成8年度より)

はじめに

三島暦は三島を代表する文化財である。そして、三島市郷土資料館にとっても、常設展示の主要展示品の一つであり、これを旨く展示し、解説することが郷土資料館の重要な使命であることも充分認識している。また、三島市内には、明治5年(1872)の太陽暦改暦まで旧暦の三島暦を版行してきた河合家という「暦師家」が今も残っている。河合家は貞享の改暦(貞享2年・1685)以前の旧暦を独自に暦算し、編集し、版行してきた暦師家である。中世には西の京暦に対して東の三島暦と並び称された伝統ある民間暦の編纂者であり、日本では数少ない暦師の家である。現在、河合家が住んでいる家は幕末の建築物で、この家屋の中で同家最後の三島暦が版行されてきたのである。住居は三嶋大社東北に位置し、旧社家村(現在は大宮町)と称され、伊豆の国賀茂郡に属していた三嶋大社神領域の特殊な地区に建っている。このように、屋敷にしても家屋にしても、そのたたずまいは近世以降変わらない姿を残存させていることもあって、暦資料を博物館内で展示させることのみならず、町並み及び家屋ぐるみとしての文化財の活用方法も将来の展示構想に入れている。すなわち、建物等をそっくり保存活用するエコ・ミュージアム資料の重要な一つに考えている。



三島暦(館蔵品)



暦師 河合家正面

しかし、今回の報告では、これを述べるのが本旨ではない。このことについては機会を改めて報告することにし、ここでは三島暦とその弘暦方法・弘暦圏及びそのほかに

ついて述べてみたい。

もう一点、三島暦の価値について。三島暦が三島四辻文化の所産であり、中世から近世にかけての時代に、三島から発信された重要な情報であったことに思っている。すなわち、暦(旧暦)が大陸から輸入され、日本人の間で使いこなせるようになり、日々の暮らしの指針として欠かせないものと思われるようになった明治初年の旧暦時代終焉の時まで、暦に書かれている内容が人々(君主も民衆も)の生活上における決断を支配してきたと言えるからである。

これから述べる三島暦の弘暦圏において、その圏内においては、そこに生まれ、生活していた膨大な数に上る人々が、少なくとも三島暦がもたらす影響を少なからず受けて暮らしていたのである。

以上のような三島暦の価値観を認識した上で、現状、調査・把握できた諸点について、若干の報告をしてみたい。

1. 三島暦

三島暦は三嶋大社の社人(下社家という呼称を使用した文献もあるが、その原史料は見つからず、明治二年の史料『三嶋大社取調書』では社人としている)の、伊豆国賀茂郡三島の河合家が代々版行してきた。三島暦の編纂及び版行の起源は、同家に伝わる伝承(奈良時代起源)、あるいは鎌倉幕府と三嶋大社の関係から(鎌倉時代起源)など、



いくつかの説があるが、何れも推定の域を出ない。

三島暦の文献初出は、『空華日用工夫略集』(義堂周信)で、応安7年(1374)3月4日の条に「伊豆熱海に浴し、三島暦を見たところ、この日を上巳節(じょうしせつ、すなわち3月3日を指す)としていた」と

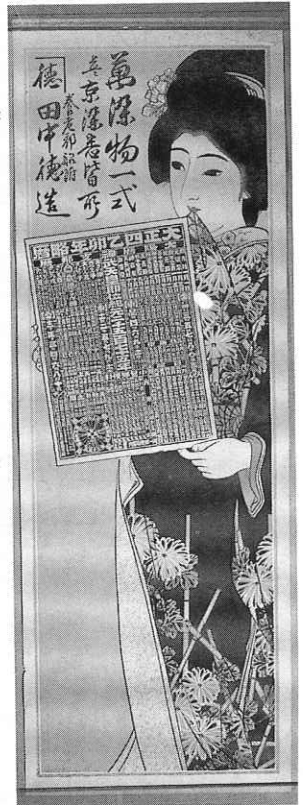
永享9年の三島暦(足利学校蔵) 記録していることから、14世紀には、すでに三島暦が存在したことが解り、かつ京暦と三島暦との間に日付の相違が見つかったという余ろくの記述も発見された。

また、中世末から近世初頭にかけては、京都摺り暦座(すりごよみざ)で版行した版暦まで「三島」と呼ばれるなど、都では三島暦の細かい文字模様は、事柄や模様などのこまごまとしたことを指す言葉の代名詞としても用いられていたという。これは、三島暦が版暦としてすでに出回っていたということであり、民間暦として京暦と並ぶ暦と認識されていたことの証拠と言える。

現存している三島暦の最古のものは、栃木県足利市の足利学校遺跡図書館所蔵の『周易注疏』表紙裏に用いられている永享9年(1437)の仮名版暦で、これには「三島」の文字が残る。また、横浜市の「金沢文庫」に伝わる文保元年(1317)の

具注暦断簡が、版暦であるところからこれを三島暦であるとする説もある。これ以外に、最近、栃木県真岡市の莊厳寺の不動尊像(居貫不動)の中から発見された庚永4年(1345)、同5年(1346)、貞和3年(1347)の三年連続した3点の仮名暦があるが、この中で特に庚永四年暦が三島暦である可能性が極めて高いと言われている。

以上のような三島暦に関するいくつかの文献や残存資料によって三島暦の起源は確実に室町期まで遡及することが出来た。今後の研究・調査によっては、更にそれ以前の時代までが明らかにされて行くであろうが、現状、暦研究者の間では鎌倉時代にはかなりの確率で三島に存在したであろうと推測されているのである。その根拠として、源頼朝の東国鎌倉政権の樹立と三島との関係が考えられるという。すなわち、頼朝政権の中で、彼の支配の核として新たに三島暦の採用を図ったであろうことは十分に考えられることなのである。

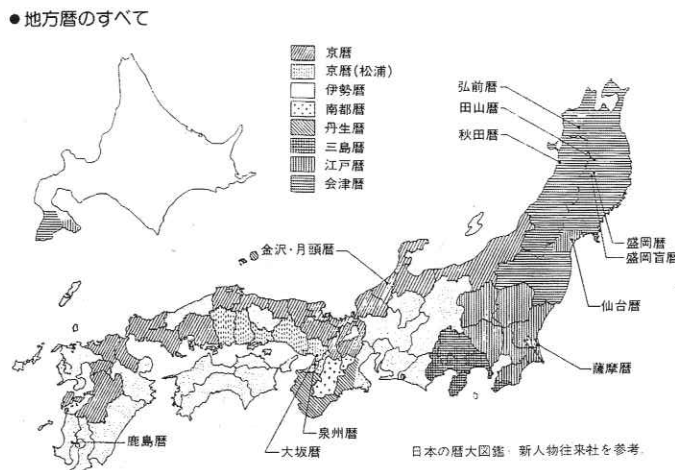


広告に使われる暦
1915年(大正4)

三島暦版行の範囲は、

古くは伊豆国を中心に東海、関東、甲信越地方であった。『北条五代記』の中の天正18年(1582)と推定される年に、三島暦と武蔵大宮暦の間に暦日の相違が発見され、以後大宮暦が廃止されたことが記されている。近世以後については、しばしば版行領域に異動があった。貞享改暦(貞享元年・1684)以後は伊豆一国と江戸での賦暦が許され、後に相模国が加えられるようになっている。(次号に続く)

明治5年(1872)の地方暦分布図



三島暦の分布図

お知らせ



四〇〇年祭キャラクター

東海道四〇〇年祭エントリ―事業

企画展 「三島宿」

平成13年3月18日(日)～5月27日(日)

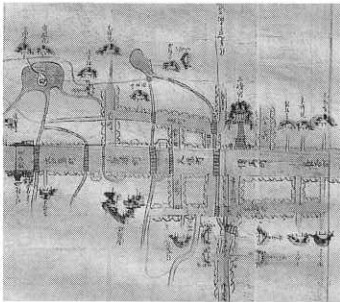
主催 三島市郷土資料館・三島市教育委員会

会場 三島市郷土資料館 1階企画展示室



三島 二代目広重

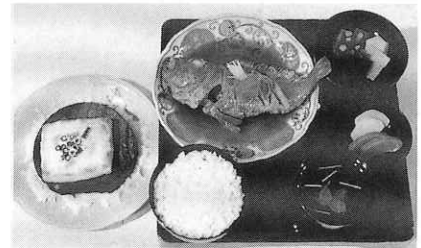
江戸時代、東海道五十三宿の中でも箱根越えをひかえ、甲州道や、伊豆への下田街道と東西南北へ向かう交差点の三島宿は多くの宿泊客でにぎわいました。この三島宿のにぎわいを浮世絵や、本陣などが所蔵した文書史料を通し広く紹介するとともに、三島の本陣・問屋場の様子、三島名物の三島暦・干し鮎など東海道の旅と、今に残る宿場の史跡を紹介します。



三島宿街道絵図(部分)

展示内容

- ・ 東海道の旅…東海道分間延絵図・旅装束・東海道すごろく・通行手形
- ・ 三島宿のにぎわい…三島宿復元模型・浮世絵・三島宿風俗絵屏風
- ・ 三島宿の往来…大名・外国使節・象・茶壺
- ・ 本陣と問屋場…本陣模型・本陣料理・本陣文書
- ・ 三島宿の名物…三島暦・干し鮎・千貫樋・三島のおせん
- ・ 三島に残る宿場史跡



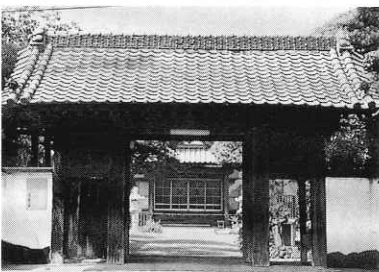
本陣料理の再現：
石焼豆腐、こおりこんにやく、さかななどが供されていた。

東海道四〇〇年祭・・・

徳川家康が関ヶ原合戦に勝利した翌年の1601年に宿駅制度を制定してから、今年2001年でちょうど400年を迎えます。

これを記念して、自治体や民間などから募集したエントリーイベントとこれらのイベントを盛り上げるシンボルイベントが、東海道をはじめ静岡県内の街道沿いなどの各市町村で開催されます。

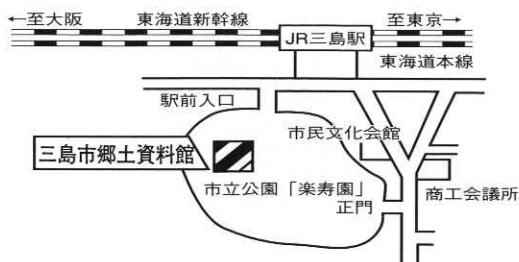
これらのイベントは年間を通して行なわれ、旅人として訪れた人たちも参加しながら、街道の歴史や文化に触れ、昔の宿場町のような交流を楽しむことができます。



樋口本陣の門(現、円明寺山門)

利用案内

休館日 毎週月曜日(祝日の時は翌日、12月27日～1月2日)
 開館時間 午前9時～午後4時30分(11/1～3/31まで)
 入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより Vol.23 No.2 (第68号)

発行日 平成13年(2001)2月10日
(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館
〒411-0036 三島市一番町19-3
楽寿園内

TEL 0559-71-8228
FAX 0559-81-3730

E-mail: kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL: http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo

発行 三島市教育委員会